
十分後

岡谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
十分後

【Nコード】
N4050E

【作者名】
岡谷

【あらすじ】
俺の友達には超能力を使えるやつがいる。そいつは他人の十分後の未来を見ることが出来るんだ。

第一話

＊

・
・
・
・
・。

・
・
・
・
・。

・
・
・ どうやら十分が経ったようだ。

・
・
・ 町には誰もいなくなった。もしかしたら地球上の全ての生き物が消えたのかもしれない。いや、たぶん何人かはいるはずだ。しかしそれは数えられる程度だろう。

・
・
・ 僕の願いは叶ったのだ。

・
・
・ でも、こんなはずじゃなかった。こんなはずじゃなかった

んだ。

・・・こんなはずじゃあ・・・。

1

俺の友達には超能力を使うことができるヤツがいる。スプーン曲げや、しょうもないトランプマジックなんかじゃないぜ。本当の超能力だ。

そいつは他人の十分後の未来を見ることが出来るんだ。なっ、すごいだろ？

そいつの名前はトシオ。俺と同じ中学二年の冴えない男だ。

俺が初めてトシオの能力を見たのは今から二ヵ月前のある昼休みの時だった。

俺が廊下を走っていたら運悪く、数学の竹下に見つかってしまったんだ。竹下は俺に、

「今から一人で廊下の掃除をしろ」

なんて言ってきやがった。

「ただ廊下を走っただけなのに何でそんなことしなくちゃなんだよ」

俺はそう言ったが竹下は、

「十分後に見に来るからな」

と偉そうにそう言いながら去って行った。

じょうだんじゃねえ。休み時間に掃除なんかやってられるか。そ

う思った俺の側にちょうどその時トシオが通りかかったのだ。

トシオは転校生で、しかもクラスも違うから話したこともなかったのだが、トシオは俺の横に来て、

「あの先生、十分後そこで転ぶよ」

と、目の前の廊下を指さしながらボソッとそう言うど何処かに行ってしまった。

何なんだあいつ？ そう思ったのだが十分後、俺は自分の目を疑った。

俺の様子を見にきた竹下が、まさにトシオが指さしたところで思いつき転んだのだ。

俺は爆笑した。

竹下はカンカンに怒っていた。おかげでその後、トイレ掃除までやらされちゃった。

そんなことがあったせいで、俺はトシオのことが気に入り、それ

からトシオと話すようになり仲良くなったのだった。

第二話

ある日、トシオと町を歩いているとき、俺はいつものようにトシオの力を見て遊んでいた。

「なあ、トシオ。また誰かの十分後見てくれよ」

俺がそう言っていると、

「またあ？さっきもやったじゃん。タカシはいつもそればかりだね。まあいいけど」

トシオは辺りを見回した。

「んー、……あっ、あの女の人、十分後にナンパされるよ」

トシオは信号待ちをしているOL風の女の人を指さしながらそう言った。

……十分後。

「ねえ、キミ今一人？おれ達と遊ぼうよ」

トシオの予言通り、女の人は見事にナンパされた。

「すげえ。さすがだなあ。他に何か面白いやつ見えない？」

「えー、面白いの？んー、・・・あつ、あの高校生、十分後に本を万引きするよ」

トシオが指さしたほうを見ると坊主頭の高校生が一人歩いていた。

そして十分後、またしてもトシオの予言は当たった。

「本当にすごいな」

「すごくないよ。勝手に見えちゃうだけだもん」

「普通は見えないけどな。つか、いつからその能力は使えるようになったんだ？」

「たぶん、物心がついた時にはもう使えるようになってたと思う」

「そんな前から使えてたんだ」

「うん。でもこの力は一人一回しか使えないんだ。だからさっきの女の人のも、今の高校生のも、もう未来を見ることは出来ないんだ」

超能力にも色々と決まりがあるんだなと思った。その時、

「よう、タカシ」

後ろを振り返ると最悪な奴が立っていた。

「小島先輩っ！」

「何そんなに驚いてるんだよ」

「すみません。お久しぶりです」

小島先輩は俺の二コ上の先輩だ。今はガラの悪そうな高校に通っ

ている。

「おう。つーかお前早く金返せよな」

「えっ、お金ならこの前ちゃんと返したじゃないですか」

「あれは俺がお前に貸した金だけだろ？まだ利子があるんだよ」

「えー、利子があるなんて聞いてませんよ」

「聞いてなかったってそんなの常識だろ。今日までの利子の五万円、明後日まで返せよ」

「そんな。五万円なんて持ってないですよ」

「そんなの知らねえよ。六時にいつもの公園で待ってるからな。ちゃんと持ってこいよ」

そう言うとき小島先輩は去っていった。

「・・・タカシ。大丈夫？」

心配そうにトシオが呟いた。

「だ、大丈夫だよ。五万円なんてどうでもなるからさ」

「だったらいいけど・・・」

「大丈夫だって。トシオが心配することじゃねえよ」

そうは言ったものの五万円なんて大金、当てなんて何処にもなかった。

＊

・・・どうしよう。

約束の時間まであと二時間しかない。もちろん五万円なんて用意出来てない。

「はあ」

溜息ぐらいしか出ねえよ・・・。

「タカシ」

いきなり声をかけられて俺は驚いた。

声のしたほうを見るとそこにはトシオがいた。

「トシオ。どうした？」

「・・・これ」

「ん？・・・え、これどうしたんだよ」

トシオの手には五万円があった。

「僕が貯金していたお金だよ。どうせお金ないんでしょ？だからこれ使ってよ」

「何言ってるんだよ。そんなのいらねえよ」

「いいから受取ってよ」

「受け取れねえよ」

「早くっ」

「お、おい」

トシオは無理やり俺の制服のポケットに五万円を入れてきた。

「もうこれでその五万円はタカシのものだからね」

「・・・トシオ・・・ありがとな」

「良いって。それより早く行ってきなよ」

「お、おう」

そう言っ
て俺はトシオに感謝しながら小島先輩が待つ公園へと向かった。

第三話

公園に着くともう小島先輩が待っていた。

「ん？おう、タカシ。ちゃんと来たんだな。てっきり逃げ出すかと思っただよ」

「逃げるわけじゃないじゃないですか」

本当のことを言うと何度も逃げ出そう思っていた。

「まあ、そうだよな。それで、ちゃんと金は持ってきたんだろうな」

「・・・はい、持ってきました」

「さすがだ。じゃあ早くよこせ」

「はい・・・」

そして俺は小島先輩に金を渡した。

「……ん？おい、何だこれ？俺は五万円持って来いって言ったんだぞ。これ五千円じゃねえか」

「すみません。やっぱり五万円は用意出来ませんでした」

「はあ？」

「だから今日はとりあえずそれで勘弁してください」

「ふざけんな！こんなんで納得できるか！」

そう言って小島先輩は俺のことを思いきり殴った。

「うっ、……すみ……ません」

「すみませんじゃねえよ！」

何度も何度も俺は殴られた。殴られる覚悟は出来ていたが、さすがに痛かった。

そういえば小島先輩、ボクシング習ってたんだ。

そんなことを薄れていく意識の中で考えていた。

「こんなじゃまだ終わらねえからな」

小島先輩は悪魔のようにニヤつきながら言った。

・・・マジで殺されるかも・・・。

そう思ったその時、

「やめろお！」

「ああ？」

「・・・ト、シオ・・・？」

「やめろお！何でタカシを殴るんだ！ちゃんとお金は払ったろ？」

「何なんだテメー。こいつは五千円しか払わなかったんだよ」

「えっ？　どういうこと？　タカシ。さっきちゃんと五万円渡したよね？」

「・・・あれは、お前の・・・金だ。やっぱり・・・俺には、使えねえ、よ」

「なに言ってるんだよ。タカシが使って良いんだよ！」

「おい！　お前。タカシのダチか？　さっきからうつとうしいんだよ！」

「うつ」

トシオは小島先輩に殴られてそのまま地面にうずくまった。

「邪魔なんだよ、テメーは」

「このヤロー！」

「うわっ」

「よくもトシオを殴ったな。トシオには手を出すんじゃないぞ！」

俺はボロボロの体で立ち上がり、小島先輩に襲いかかった。

「ああ？この野郎！調子こいてんじゃないぞ！」

「うあっ！」

小島先輩は、まるでボールを蹴るかのようにな度も地面に倒れた俺を蹴った。

「テメー、殺す！」

ますます蹴りは強くなっていく。

「や、めろお・・・」

「オメエもしつこい奴だな」

トシオ……。やめろ。やめるんだ……。これ以上お前に辛い
思いをさせたくない。

そう思って、小島先輩へと向かって行こうとするトシオを止めよ
うとしたのだが、もう俺の体は言うことを聞いてくれなかった。

「……お前は最低の人間だ」

「何だこの野郎！」

「お前なんか生きている資格はない！」

「デメー！ふざけんじゃねえ！マジぶっ殺す！」

「お前は……お前は十分後に死ぬ！」

トシオは何を言っているんだ？適当に言ったのか？それとも本当
に……。

「死ぬのはお前のほうだよ！」

小島先輩はトシオに襲いかかった。しかし、その時、

「こらー。そこで何をしてるんだ！」

「やべえ、おまわりだ」

良いところに来た。俺は生まれて初めて警察に感謝した。

「お前ら次は絶対に殺してやるからなっ」

そう言って小島先輩は警察から逃げるように走り去っていった。

「こらー！待ちなさい！」

そう言って待つわけもなく、小島先輩は全力で逃げた。

鉄棒をくぐり抜け、ベンチを飛び越え、砂場を駆け抜けて公園の入口へと向かった。

しかし、そこで悲劇が訪れた。

小島先輩が勢いよく道路に飛び出した瞬間に小島先輩は宙に舞った。

車に撥ねられたのだ。

「た、大変だ！君たち、ちょっとそこで待っていなさい」

そう言って警官はたった今、交通事故が起きた現場へと駆けていった。

「・・・あ、あ、あ」

ん？どうしたんだ？トシオの様子がおかしい。

「・・・ぼ、僕」

何なんだ？どうしたっていうんだ？

「・・・あ、あ」

ちくしょ！何なんだよ！

「うおおお！」

俺は最後の力を出して立ち上がった。

「・・・はあ、はあ、はあ」

「・・・」

トシオは依然として放心状態のままだ。

「はあ、はあ、はあ・・・ト、トシオ。俺たちも早く逃げるんだ！」

俺はトシオの手を引っ張り、体中にある痛みを忘れて無我夢中で走った。

第四話

どのくらい走ったのだろうか？

気が付くと俺たちは来たことがない商店街にいた。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・トシオ。お前に何があったんだ？
頼むから教えてくれ」

「・・・僕、僕」

「うん、お前がどうしたんだ？」

「・・・僕、・・・あの人を・・・殺しちゃった」

「え？何言ってるんだよ。お前は悪くないよ。お前はただ未来を言っただけだ」

「違うんだ」

「違うって何が？」

「僕は、・・・本当は未来なんか見えないんだ」

「え？嘘言うな。お前はちゃんと未来を見てたじゃねえか。あれは嘘なんかじゃねぞ」

「違うんだ。あれは全部、僕が思ったことなんだ」

「え？どういうことだよ」

「僕が思ったことが十分後に起きる。それが僕の本当の能力なんだ」

「そんな・・・じゃあこの前、女の人がナンパされたのも、高校生が万引きしたのも、全部お前が思ったことだっていうのか？」

「そうだよ。さっきのあの五万円だって昨日、お金をいっぱい持っていたような人にこの力を使ったんだ。十分後、あなたは財布を落とす、って。僕は最低の人間なんだよ」

「でもそれは俺を助けるためにしたことだろ？」

「うん。・・・だけど、僕は人を殺してしまった」

「・・・あれは、しょうがないよ。あいつは最低の奴だったから」

「それでも、人を殺したのは変わらない。僕は人殺しだ」

「そんなに自分を責めるな。俺はお前が悪いなんて思ってないぞ。むしろ俺の事を守ってくれて嬉しいぞ」

「タカシ……。ありがとう」

「無理かもしれないけど今日のことは忘れろ。いいな」

「う、うん……。」

「よし。それでいい。ところで何でずっと隠してたんだよ」

「え？」

「本当の超能力のことだよ」

「だって本当のことを言ったらみんな怖がるでしょ？僕は生きているもの全てを操ることが出来るんだよ」

「まあそうだけど・・・」

「本当はこんな力なくなっしてほしいんだ。そうすれば僕も普通の人間になれるのに」

「じゃあなくしちゃえば良いじゃねえか」

「え？」

「その力は自分にも使えるんだろ？」

「やったことないから、わからないけど・・・」

「十分後にその力が使えなくなるように願えばいいじゃねえか」

「あっ！そうか。そうだよ。何で今まで気がつかなかったんだろ」

「ははっ。まあ少しもつたいない気もするけど、トシオが本当にその力を消したいんだったら消しちゃえよ」

「うん、そうするよ。ああ、これでやっと普通になれるんだ」

トシオは笑顔だった。

それは今まで見た、どの顔よりも良い顔をしていた。

そして、トシオは叫んだ。

「・・・十分後、僕はこの能力が使えなくなる!・・・」

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4050e/>

十分後

2011年1月27日02時04分発行